

宮古語諸方言における文脈指示のバリエーション

林由華（日本学術振興会／国立国語研究所）
衣畑智秀（福岡大学）

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成プロジェクト
第一回研究発表会「指示詞・代名詞」（2017.6.11）

要旨

日本語標準語における指示詞の文脈指示用法では、対象が話し手と聞き手の共有知識にある場合とない場合とでア系列とソ系列の使い分けがなされるといわれている（久野 1973 など）。本発表では、宮古語諸方言の指示詞の文脈指示用法について、この共有知識にあるかないかという基準のほか、指示対象の話し手からの距離も形式の使い分けにおける基準になっていることを示す。また、方言ごとにどの基準を優先させるかで二極化しており、**主に話し手からの距離が問題となる方言（北方の方言）と、それに加え共有知識かどうか形式の使い分けに大きく影響する方言（南方の方言）と、その中間的な様相を持つ方言が見られることを示すとともに、どのような変化によってバリエーションが生じたのかについて検討する。**

構成

1. 先行研究とイントロダクション
2. 調査デザインと調査結果
3. 考察

補足資料

- ① 内間 (1984) による琉球諸語の指示詞体系の類型と各地の例
- ② テスト文と調査結果

1. 先行研究とイントロダクション

琉球諸語の指示詞

- ku系、u系、a (北)・ka (南) 系の3形式。形式的に2系の方言と3系の方言がある

表：内間 (1984) による諸方言の指示体系の類型

甲種	I類	ku系 u系 / a系	北琉球 (+ 大浦、与那国)
	II類	ku系 / a系	
	III類	u系 / a系 (北)・ka系 (南)	
乙種	IV類	ku系 / u系 ka系	南琉球
	V類	ku系 / u系	
丙種	VI類	ku系 / u系 // a系	北琉球 (+ 多良間)

※ 内間の用語では、ko系 (ku系) / o系 (u系) / a系 (a・ka系)

琉球諸語の指示詞

- 内間の I類～VI類（補足資料①参照）
 - 指示体系すべてを勘案した分類（"情態"なども含む）
 - 少なくとも宮古について、IV類（ku系 / u系 ka 系）に問題あり
 - 3系対立の場合、ku、uに全く違いのないI類か、kuとuが近いVI類になるのでは？（=> 琉球諸語ではおそらく、ku系とu系の使い分け記述が難題）

- 文脈指示用法についての研究はほぼない

南琉球の指示詞（直示用法）

- 柴田（1980） 宮古語（平良）

話者からの距離で3系列を区別

ku系：近称 / u系：中称 / ka系：遠称

- 荻野（2009） 八重山語（石垣・川平・宮良）

ku系とu系の違い

=> uがkuを包摂しており、kuのほうがより指定性が高い

宮古語の指示詞

- 形式的に 2 系方言（u系、ka系：大神、狩俣）と 3 系方言（ku系、u系、ka系：それ以外の方言）
- 多良間は 6 系列??（長嶺 2015）

宮古語の指示詞

- 宮古語の直示用法における ku 系と u 系の使い分け
=> 方言によって異なるが詳細は不明。解明困難。まったく同じになる方言（大浦）もある（-> 内間の I 類）
- 一方で・・・
 - ka系については、**直示用法**ではほぼ日本語のア系と似たふるまい
 - 日本語では**文脈指示**においては主としてソ系とア系での対立となり、コ系はごく限られた使用となる。宮古語でもka系とu系の対立を観察することができる

日本語指示詞の文脈指示用法

- 久野 (1973) など

ア系列	指示対象が話し手と聞き手の共有知識にある場合
ソ系列	指示対象を話し手もしくは聞き手がよく知らない場合

予測と調査デザイン

- 変数とした要素：
指示対象が
 - 1) 共有知識／話し手のみの知識／聞き手のみの知識のどれにあるか
 - 2) 指示対象が話者から遠いか近いか、または非存在か
- 文脈指示はほぼka系かu系でできる
=>今回はこの使い分けに焦点を絞る
- 変数のマトリックスと対応するテスト文（補足資料②参照）

変数のマトリックスとテスト文

- テスト文と結果詳細については補足資料②を参照

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	(ア)	(イ)	(ウ)
近	(エ)	(オ)	(カ)
非存在	—	(キ)	(ク)

調査方法

- 調査者が調査文をよみあげ、話者に共通語から方言へ翻訳してもらう
- ターゲットとなる指示詞について、最も自然に使用できる形式を記録するほか、それ以外の形式が許容されるかどうか確認する
- 調査は前半と後半に分け、それぞれ日を変えて行う

調査地

狩俣・大浦・西原・荷川取・松原・新里・与那覇

(部分的に終了)

島尻・新城・多良間



結果提示

参考：日本語の場合

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ア	ソ	ソ
近	ア	ソ	ソ
非存在	—	ソ	ソ

結果

- ① ka優勢方言群と、u優勢方言群とその中間方言群がある
- ② 文脈指示においても指示対象が近いか遠いかで形式の使い分けがある
- ③ 共有知識か非共有知識かだけでなく、話し手のみの知識か聞き手のみの知識かも問題となる

表：日本語の場合

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ア	ソ	ソ
近	ア	ソ	ソ
非存在	—	ソ	ソ

結果①

① ka優勢方言群と、u優勢方言群とその中間方言群がある

狩俣

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ka	ka	ka
近	ka~u	u	ka~u
非存在	—	ka	ka

新里

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ka	u	u
近	u	u	u
非存在	—	u	u

結果②

② 文脈指示においても指示対象が近いか遠いかで形式の使い分けがある

- ka 優勢方言のうち、2系列である方言<狩俣>では、指示対象が遠い（ア～ウ）か近い（エ～カ）かで kaとuの使い分けがなされている
- u 優勢方言<新里>でも、指示対象が「遠くてかつ共有知識」である場合（ア）では kaを用いている

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	(ア)	(イ)	(ウ)
近	(エ)	(オ)	(カ)
非存在	—	(キ)	(ク)

結果③

③ 共有知識か非共有知識かだけでなく、話し手のみの知識か聞き手のみの知識かも問題となる

- ・ 中間方言も含め、指示対象が共有知識 > 話し手のみの知識 > 聞き手のみの知識 の順で、ka が用いられやすい
- ・ ka 優勢方言のなかでも、指示対象が聞き手のみの知識でかつ近い（カ）・非存在（ク）の場合にuが用いられる方言<荷川取>がある

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	(ア)	(イ)	(ウ)
近	(エ)	(オ)	(カ)
非存在	—	(キ)	(ク)

結果（狩俣） <ka 優勢方言>

- 直示においても形式が2つしかない2系列
- 共有知識かどうかでなく、指示対象の距離が形式を区別する主な基準となる
- 3系列だが直示においてkuとuに全く違いのない大浦も同様の結果。直示における近称／遠称の対立がそのまま持ち込まれている

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ka	ka	ka
近	ka~u	u	ka~u
非存在	—	ka	ka

結果（新里） <u 優勢方言>

- ・ 直示においては3系列で、3つの使い分けあり
- ・ 指示対象が共有知識でかつ遠くにある場合のみkaを用い、それ以外はすべてuとなる

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ka	u	u
近	u	u	u
非存在	—	u	u

結果（中間方言）

- ・（ア）に主にkaを用いること、（カ）に主にuを用いるのは、どこも共通している
- ・ 指示対象が「共有知識 > 話し手のみの知識 > 聞き手のみの知識」の順で、kaが用いられやすい
- ・ 北部のka優勢方言以外では、（ク）にuを用いる傾向がある

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	（ア）	（イ）	（ウ）
近	（エ）	（オ）	（カ）
非存在	—	（キ）	（ク）

結果（中間方言）

西原

	共有知識	話者のみ	聞き手のみ
遠	ka/?u	u/ka	u/?ka
	ka/?u	u/ka	u/?ka
	ka/u	u/ka	u/?ka
	ka/u	u/ka	u/?ka
近	u/?ka	u/?ka	u/?ka
	u/ka	u/?ka	u/?ka
	ka/?u	u	u/ka
	u/ka	u	u/?ka
不	1e	u/ka	u/?ka
	1f	u/ka	u/?ka
		u/?ka	u/?ka
		u/?ka	u/?ka

松原

	共有知識	話者のみ	聞き手のみ
遠	ka/??u	u/ka	ka/?u
	ka	u/??ka	u
	ka	ka/?u	u
	ka	u/??ka	u
近	u/??ka	u/??ka	u/?ka
	u	u/??ka	u
	ka/u	u	u
	ka/u	u	u/??ka
不		u/??ka	u
		?u	u
		u	u/??ka
		u	u/??ka

与那覇

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ka	ka	ka
	ka	ka/u	u
	u/ka	ka/u	ka
	u/ka	ka	ka/?u
近	ka	u/ka	ka/u
	ka	u/ka	u/ka
	u/ka	u/ka	u/ka
	ka	u	u
不		ka/u	u
		u/ka	u/??ka
		ka/u	u/ka
		ka/u	u/ka

ka 優勢方言の別パターン（荷川取）

- ka優勢ではあるが、uが占める位置がと異なり、指示対象が聞き手知識にありかつ近いもしくは不在の場合に u を用いている

	共有知識	話し手のみ	聞き手のみ
遠	ka	ka	ka~u
近	ka	ka	u
非存在	—	ka	u

地図上の分布

ka優勢	狩俣・大浦・荷川取
u優勢	新里
中間	西原・松原・与那覇



考察

このような方言バリエーションが何故生じたのか？

- ・ 共通語化とはいえない

共有知識のみを ka、それ以外を u とする方向に変化していると考えられる方言はない

- ・ 直示用法とどのように関係しているのか？
- ・ u が ka に変化したのか、ka が u に変化したのか？両方向なのか？

変化についての仮説

宮古語祖語の段階から・・・

- 仮説1：文脈指示はすべて ka で、そこに u が侵入
- 仮説2：文脈指示はすべて u で、そこに ka が侵入
- 仮説3：狩俣タイプ（もしくは荷川取タイプ）が初期値で、ka と u が方言ごとに異なる形で置き換わる
- 仮説4（≡仮説2）：新里タイプが初期値で、u が ka に置き換わる
- 仮説5：中間的な状態で、ka 優勢群と u 優勢群に別れる

勘案すべきこと

- 現在機能的に2系（狩俣、大浦）であるか3系（それ以外）かで文脈指示のあり方も異なっている
 - =>各方言で直示用法における u と ku の使い分けの有無が文脈指示と相関？
- 琉球諸語全体で2系のところと3系のところがあることを考えると、宮古語祖語の段階でも（2系に合流しつつある？）3系であったと考えるのが妥当。ただし、現在3系の方言の文脈指示用法における形式の使い分けがそのまま宮古語祖語から引き継いだものであるとは限らない
- u系は日本上代語で主に文脈指示や観念指示に用いられていたとするソ系（橋本 1986、金水ほか2002）とは形式的に直接的なつながりが認められない（内間 1984）。

まとめと展望 (1)

- 文脈指示についてのまとめ

- 指示対象が話し手と聞き手の共有知識にあるかどうかの問題となる日本語共通語と異なり、宮古語においては指示対象が遠いか近いか、また共有知識・話し手の知識・聞き手の知識のどれであるかが問題となる
- 宮古語諸方言の中でも、それらの基準のうちどれが優先されるかが方言により異なる
- 2系方言においてはkaが優勢でかつ指示対象が近いか遠いかが形式使い分けの基準となり、直示要用法をひきついだものと考えられる

まとめと展望 (2)

- 直示も含めた機能の区別について
 - 今回のデータには含めていないが、文脈指示で u が使える場合、同様に ku も使える場合とそうでない場合がある。文脈指示で u と ku が同じように使える方言の場合、直示用法においてもその2つがかなり近い可能性が高い
 - 文脈指示で ka が優勢であることは、直示用法において機能的に 2 系に近い
いか 3 系に近いかとも相関性がある可能性がある

参照文献

内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の研究』 笠間書院

荻野千砂子 (2009) 「琉球八重山地方の指示詞について」 『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』 41: 17-24

金水敏・岡崎友子・曹美庚 (2002) 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究」 『シリーズ言語科学 対照言語学』 217-247 東京大学出版会

久野暲 (1973) 「コ・ソ・ア」 『日本文法研究』 185-190 大修館書店

柴田武 (1980) 「沖縄宮古語の語彙体系⑩」 『月刊言語』 105: 104-107 大修館書店

長嶺浩司 (2015) 「多良間方言の指示語」 沖縄国際大学卒業論文

橋本四郎 (1986) 「古代語の指示体系—上代を中心に—」 『橋本四郎論文集国語学編』 209-227 角川書店